



# Artist In School

アーティストと  
考える学校の未来

札幌アーティストインスクール事業  
おとどけアート2018記録集

発行 おとどけアート実行委員会

企画・編集 一般社団法人 AISプランニング



## はじめに

2008年度にスタートしたおとどけアートは、学校という場を媒体としてアーティストの多様な価値観や生き方を表現することにより、人と人、人と環境を結びつける新たなきっかけとなることを目指し活動を展開してきました。

おとどけアートは“いつもの学校”に、ある日突然大人の転校生(アーティスト)がやってきます。子ども達にとって“いつもの学校にいる大人の転校生”との出会いは、日常接している大人、つまり家族でもなく先生でもない不思議な存在になり、校内でこれまで経験したことのない時間や空間や活動をもたらします。アーティストとの出会いは芸術をより身近に感じることに留まらず、ものの見方や考え方にゆさぶりをかけ、学年学級、さらには学校を超えたコミュニケーションが生まれ、子ども自身もつ創造性や可能性を引き出すことが期待されます。

おとどけアートは当初より「コミュニティとは？」をキーワードに、「学校のもつ機能の拡張」「地域の拠り所を生み出す場づくり」を目的とし、アーティストの派遣をきっかけに、子どもと子ども、子どもと教職員、さらに学校と地域との出会いや交流の活性化、充実を視野に活動を展開し、昨年度まで札幌市立小学校29校のご協力をいただき実践を重ねることができました。スタートから11年目を迎えた今、「学校の日常って?」「社会の中の学校って?」など原点とも言える疑問に目を向け、おとどけアートが「学校」という場で活動する意義を再考しながら現在に至っています。

実施校は、今年度も公募により決定し、西園小学校・本町小学校・ひばりが丘小学校の3校で行いました。

活動にあたっては事前に学校と話し合いをし、学校の特色や実態、おとどけアートに期待することなどを踏まえてアーティストの選定を行います。実施した3校は地域環境・歴史、学校目標や教育活動の特色はそれぞれ異なりますが、派遣されたアーティストは学校や地域がもつ環境や子どもに対する夢や期待を理解し、そこでの可能性を追求することに努めました。また、今年度は3校ともあえてゴールを設定せずに、子ども達や先生方の反応とアーティスト自身のモチベーションをどのように織り進めていくかを考えながら展開していったことや、2度目の転校生となったアーティストがいたことなどが特色となりました。限られた開催期間ではありましたが、この度“この学校とこのアーティストだからできた”活動の様子を報告書としてまとめました。

2018年度の活動報告書の発行にあたり、ご協力をいただいた学校の教職員、アーティスト、そして本事業の運営に携わる関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、これからも私たちは“いつもの学校”の中で子どもとアーティストの出会いの場をつくり、子ども達の新たな価値観や学びが生まれることを願い活動を進めてまいります。

おとどけアート実行委員会 委員長 池田悦子

## 目次

03	はじめに
05	おとどけアートって？
06	2018年度活動紹介
	・札幌市立西園小学校 × 永田壮一郎 ・札幌市立本町小学校 × 中島佑太 ・札幌市立ひばりが丘小学校 × 上ノ大作
12	2018年度活動報告座談会 それぞれの活動を振りかえって
17	総括 アーティストと考える学校の未来
18	これまでの活動実績



## おとどけアートって？

本事業は、アーティストが一定期間(数週間から数ヶ月)学校に通い、空き教室などの学校の余剰空間をアトリエとして活用しながら創作活動を行う「アーティスト・イン・スクール」の仕組みを活用し、アーティストが子ども達や先生、地域の方々和学校という場を介して出会い交流する事業として、2008年から札幌市内の小学校を対象にスタートしました。様々なアーティストの表現や価値観、生き方に触れることが、学校や地域の日常に普段とは異なる視点をもたらし、今までにない他者との関わりを育む学校そのものの場の可能性について考えるきっかけになることを目指して活動を展開しています。

活動ブログ <https://inschool.exblog.jp/>



### おとどけアート実行委員会について

2008年設立。会員数12名。美術教育や社会教育の研究者(北海道大学など)や、市内小学校教職員、文化団体職員、アーティスト、学生などの市民で構成。おとどけアートの活動を通じて子ども達が豊かな感性と多様性を学び、地域の人々とのつながりを活性化、促進することを目指しています。

### おとどけアート実行委員会事務局について

おとどけアート事業の事務局として活動のコーディネートを担う一般社団法人<sup>アイス</sup>AISプランニング(\*1)は、学校、文化施設、商店街、公園など生活に身近な場所に注目し、アートを媒介として、人々の新たな関係性が構築されていくきっかけを生み出す取り組みを展開しています。北海道内におけるアーティスト・イン・スクール事業の運営をはじめ、アーティストと子どもに関する全国各地の取り組みを紹介する「アーティスト×こども(\*2)」サイトの運営や、アーティストの活動を支える文化施設の管理運営なども行っている団体です。

\*1…<sup>アイス</sup>一般社団法人AISプランニング <http://ais-p.jp/>

\*2…アーティスト×こども <http://artists-children.net>

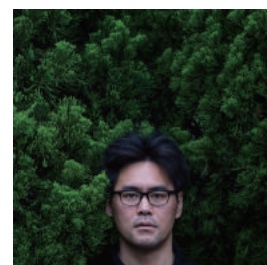
# 札幌市立西園小学校 × 永田壮一郎

開催期間 2018年10月30日(火)～11月9日(金)  
参加人数 教職員34名、児童567名  
(平成30年4月時点)  
活動場所 図工準備室、音楽室など



## 活動内容

音楽家の永田壮一郎さんが、休み時間や給食時間のほか、時には授業の時間にも参加し、学校に関わる一人一人との交流を行いました。活動の途中では、人数が少なく廃部の危機にあるスクールバンド部と出会い、そこに所属する子ども達を中心に練習の日々を過ごし、活動の最終日には音楽室で教職員や、演奏を聴きに訪れた子ども達をも巻き込みながら、期間中に創作した曲を演奏しました。



永田壮一郎 (Soichiro Nagata/音楽家、作曲家)

山口県防府市出身。高校の音楽教師、ピアノの指導者でもあった母親の影響で幼少よりピアノを習う。大学進学時に上京。以降東京を拠点に活動。自身が主宰するKIJIMA SOUNDSYSTEMでは、弦楽四重奏とバンドプログラミングの同時演奏・同時映像や、大人数ダブルバンド形態の自由即興等、様々な演奏スタイルに取り組む。近年は、永田壮一郎一人によるリアルタイムプログラミング、コントロールという形態を主として日々音楽活動を行う。

<http://thomasrecordings.com/artist/nagata-soichiro/>

## 西園小学校での活動を振り返って

アーティストと子ども達との関係性について、印象的だったことが二つある。

一つは、ある学級に置ける永田壮一郎さんの存在のあり方。その学級は担任の先生からのお声かけもあり、期間中何度かに渡って授業に参加することになり、児童と一緒に授業を受けていたが、時として教職員と一緒に何かを教える側にも回っていた。最初は、半ばゲストのような形で教室の一番端で授業を受けていたのだが、数を重ねる毎に徐々に学級の中心の席と入っていき、そして永田さんの席の周囲の児童は、永田さんがいようがまいが、特に気にする様子もなく自身の学習に集中していったことが、とても不思議な光景として記憶に残った。また、児童や教職員と永田さんのやりとりを見聞きしていると、彼らにとって永田さんは児童でも教職員でもなく「永田さん」として存在を受け入れているように見受けられた。それは一見、転校生として入ったアーティストが学校における日常に回収されていくようでもあるが、教職員でも児童でもない第三の存在が授業という学校のシステムの一つに加わっていった先に何があるのか、その先にあるものを見てみたいと可能性を感じた機会だった。

もう一つは、活動終了後に実施した児童を対象にしたアンケートをとったところ、「永田さんが学校に来て変わったことがあるか」という設問に対し、同じ学級の友達の反応や、学校全体の雰囲気の変化を感じるとした回答が一定数あり、そのように回答している児童らは、永田さんとは給食時間を除き、授業など直接の関わりがなかったと思われる児童たちであった。たまたまコーディネーターの気づかぬ間に交流があったかもしれないが、永田さんの近くにはいない、直接的なやりとりがなくとも、児童らが「永田さん」という存在が学校の中にいると認知することによって、児童たちが何かをふと感じた瞬間に「もしかしたらこれはアーティストがもたらしたもののなかも」と捉えるきっかけになりうるのだということを実感した。

今回の活動では、アーティストは、自身が中心となってあらゆる人とひたすらに1対1の関係性を築いていくことを行った。それは誰もが生きていく上で無意識的に行っていることでもあるが、その人でしかできないことでもある。学校という場合は、教職員と児童と保護者という大きく3つの立場のいずれかに属する人がほとんどで、それぞれの関係性のあり方が程度固まってしまうがちと感じている。(もちろんそれぞれの役割が明確になることで物事がスムーズに動きやすいという面もあるため必要なことでもある。)しかし、そこにアーティストという第三者が入ることによって新たな関係性が必然的に形成され、違和感となって現れる。その違和感こそが、それまでに気づかなかった何かを発見したり、再考の余地を生み出す要素なのではないだろうか。この違和感はその段階では良いも悪いもなく、また、その感覚に対する反応や影響には個人差があることはいまでもない。この違和感が必要条件となったときに、違和感をもたらすためにどのようにアプローチを行うべきなのかは、コーディネーターとして問われる部分が大いところではあるが、常に抱えるべき問いだろう。

改めて活動を振り返ると最終日の音楽室でのスクールバンドの演奏も、アーティストの意図のもと、奏者が教職員から演奏を聞きに来た子ども達へと移っていき、そのまま楽器を奏でながら徐々に廊下に出ていくというものだった。果たしてあの空間でこの全体像を把握できた人がいたのだろうか。おそらく各々の主観でもってしか捉えることができなかったと思われる。そしてそれらは客観的には判断できず、正解も間違いもないその人が持つ唯一のものであるだろう。永田さんの西園小学校の活動の中で行った個人へ投げかけるような姿勢は、どのような形で関わったそれぞれの中に響いたのだろうか。

スクールバンド部の部長と出会い、スクールバンド部の人数を増やすと宣言した永田さん。活動終了後、スクールバンド部の入部希望者が増えたことを部長からの手紙で知り、嬉しそうに喜んでいた顔が忘れられない。

担当コーディネーター 杉本 直貴



# 札幌市立本町小学校 × 中島佑太

開催期間 2018年11月12日(月)～11月26日(月)  
参加人数 教職員27名、児童325名  
(平成30年1月時点)  
活動場所 学習室B



## 活動内容

アーティストの中島佑太さんが、約二週間小学校を拠点としながら、様々な場所に赴き、子ども達の日常を探る活動を展開しました。空き教室の中心に段ボールの井戸を置き「井戸端会議」と称して交流をしたり、日常の中での出会いや発見をもとに認めたお手紙を全校に向けて送ったりする中で、アーティストに興味を持った特定の児童や先生との関係を重視しながら様々な対話を生み出してきました。



中島佑太 (Yuta Nakajima/アーティスト)

「1人でやらない」をモットーに、他の誰かと一緒につくるアーティスト。身の回りにあるルールや地域や家族の慣習、当たり前などを問い直し、遊びに置き換えてみるワークショップを多く展開している。代表的なプロジェクトに、《家族のルール》鳥取藝住祭(2014)、《LDKツーリスト》アーツ前橋(2016-)など。その他、PARADISE AIR(2014)のプログラム設計、私立保育園へのアーティスト派遣事業(2018-)など、ワークショップを用いた領域横断的なアートプロジェクトを企画・実施している。

<http://nakajimayuta.net/>

## 新たな世界を予感する

中島佑太さんは、様々な地域や事業の中で「ワークショップ(ここではアーティストが提案するプランに基づいて参加者と様々な創作活動を行う取り組み)」の手法を用いた表現活動を展開しているアーティストである。

そんな彼の当初のくろみは、普段用いている手法を一旦封印し、あえて明確なプランを提示せず、学校にいる人々との関わりの中から発見する「多面的な要素」を素材にして、何らかの創作行為に及んでいくことを想定していたのではないかと推測する。

初日に活動拠点の教室に置かれた「井戸」は、正にその「多面的な要素」をあぶり出すきっかけとして、スタジオを覗きにきた子ども達や先生との交流をととも自然な形で生み出していった。ただ、文字通り「井戸端会議」から始まった状況任せの今回の活動が、どのような展開になっていくのか、その時点では誰も予想がつかない状態であった。

そうした最中、中島さんはあることを発見する。宗教上の理由で給食に通常とは違うおかずを持参している子ども達の存在だ。「その子ども達は普段家庭ではどんな食事をしているのだろうか?」

アーティストの興味は、給食を介して日本とは異なる食文化に向かっていった。そして偶然にも、そうした子ども達のひとりである女子児童との出会いがきっかけとなって、活動は誰もが想像していない方向へと導かれていく。

「私は芸術家になりたい!中島さんと一緒に絵を描きたい!」

その女子児童の存在は、中島さんにとって本町小学校に在籍している子ども達の日常を知る手がかりとして、或いは学校という限定された社会の中から世界について考えるきっかけとして、とても大きな興味の対象となったことは間違いない。以降、休み時間になると欠かさず現れる彼女やその仲間達と一緒に絵を描くことになっていく。

一方で、そうした活動が始まった直後にその女子児童のお母さんとも知り合うことができた。そして、ご家族が日頃通っているモスク(イスラム教徒が集まる集会所)に同行させてもらい、彼らの哲学や食文化など、イスラムの世界に触れる機会にも恵まれた。

更に中島さんと女子児童との関わりは、学校やモスクでの交流にとどまらなかった。芸術表現の手法が絵を描くだけではないことを一緒に確認するために、彼女のご家族もお誘いしてフゴッペ洞窟へ見学に行くほどに発展していったのだ。

気がつけば彼女は、一緒に絵を描くという行為から、同じクラスの子ども達に中島さんのこれまでの活動や作品を紹介していくようになっていた。更に最終日には、彼女がコーディネーター役となって、担任の先生をも巻き込んで中島さんがあえて封印していたワークショップを実施させるまでに至った。

彼女の中でどのような心の変化があったのだろうか。

ひとつ言えることは、アーティストとの出会いや対話をきっかけに、一緒に絵を描くという小さな欲求から自分が知った新たな世界を他の人と共有したいという個人の自発的、主体的な行動として立ち現れていったということだ。それは、アーティストが自ら生み出す芸術作品や直接的な表現とは異なる価値を持ち、波紋が広がるようにクラスメイトや担任の先生にも影響をもたらしていったと想像できる。

最終日、数名の子どもや先生から「作品は完成したんですか?」と尋ねられた。

前述の通り中島さんは、目に見える形で芸術作品なるものを制作していたわけではない。彼がやっていたことは、子ども達や先生たちとの様々な対話や関係性を構築していくことを通じて、「芸術家=絵が上手」「芸術=作品をつくる」という彼らの中に潜む先入観や思い込み(或いは、そもそも芸術とは? 芸術家とは何か?ということについて)に対して、アーティストとしてどう向き合ふべきか考え続けていたということに尽きる。

振り返ってみると彼は、今回の活動を始める少し前から小学校宛に旅先からの手紙を送っていた。活動が始まってからも、学校での生活や滞在中に起きた出来事などを題材に、手紙を送り続けていた。そして、活動を終えた今尚旅先から小学校に手紙を送り続けている。おそらくこれからも送り続けるのだろう。

限定された日常の世界と別な世界との繋がりを予感させる存在として、或いは時々現れる旅人のように新たな世界の存在を示唆するプロジェクトとして、中島さんと学校との関わりは、これからも続いていくのかもしれない。

担当コーディネーター 漆 崇博



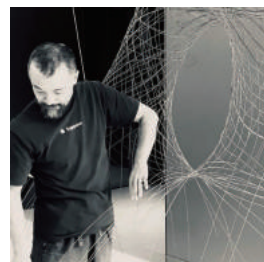
# 札幌市立ひばりが丘小学校 × 上ノ大作

開催期間 2018年9月18日(火)～  
12月25日(火)※内28日間  
参加人数 教職員24名、児童311名(平成31年3月時点)、  
保護者・一般参加者約50名  
活動場所 陶芸室



## 活動内容

小学校の陶芸室を拠点に、陶芸・造形作家の上ノ大作さんが活動を実施。滞在制作を通じた児童との交流も行いながら、PTAの方々との陶芸体験、6年生との授業(シーサー作り)、札幌東商業高校茶道部との茶道体験なども実施。活動発表会には児童と共に制作したオリジナルの和室でお茶会を行った。



上ノ大作 (Daisaku Ueno/陶芸家、造形作家)

1970年生まれ。北広島市を拠点とする。25歳の時、約6年のサラリーマン生活から陶芸の道に飛び込み9カ月かけてオートバイで全国の窯元を巡る旅をする。札幌近郊の北広島市に穴窯をつくり、道内の土を使った焼締の陶づくりを中心に、近年は木や竹等自然に由来する素材を用い屋内外を問わず空間に立体物を構築している。2016年、第26回道銀芸術文化奨励賞受賞。

## ひばりが丘小学校の「おとどけアート」を通じて

2018年の1月末頃、小学校の下見にやってきて紹介されたのが陶芸室だった。すぐにこの場所で繰り広げられる活動のイメージが浮かんだ。そして活動のパートナーとして上ノ大作さんに声を掛けた。

おとどけアートの魅力は、活動の自由度にある。大まかな方向性を頼りに活動が始まるため、その時点では具体的に何が出来るか、どうなるのかはわからない。しかしながら、それによって様々な要素を活動に取り入れる「遊び」や「余白」が担保され、思いもよらぬ変化を遂げることがあるのだ。よって我々コーディネーターの役割は、小学校とアーティストの間に立ち活動全体のバランスをとることにある。確固たるゴールを決めないことによって活動の自由度を保ちながらも、より多くの参加者に関わってもらおう工夫として分かりやすい形を見せることも必要となる。コーディネーターの醍醐味とは、矛盾を孕んだこの状況下でどういった要素を組み合わせるかという流れを生み出すかということに尽きる。

それで言うと今回は「陶芸室に陶芸家を呼ぶ」という状況設定だったということもあり、活動が始まってすぐに小学校側からいくつかの提案を頂いた。保護者対象の陶芸教室と、図工の授業の指導(シーサー制作)だった。コーディネーターからすれば児童や保護者との交流のきっかけになる有難い状況なのだが、アーティストからすれば多大な作業(約100名分の作品の素焼き・釉薬塗り・本焼きなど)を引き受けるという意味を持っていた。上ノさんとしては決して多いとはいえない時間(中休み、昼休みの一日約40分ほど)の中で自身の創作活動を通じた交流を行うため、提案を断るという選択肢もあったのだが、その両方を快諾してくれた。(後日談になるが、おとどけアートの話を聞き、下見で陶芸室を見た時点でこういった状況は覚悟していたとのこと)

その結果、上ノさんは当初予定していた日程よりも大幅に活動日程が増え(全28日間)、全ての焼き物を仕上げながら、展示に向けた制作を行うという超ハードスケジュールに見舞われた。その甲斐あって、陶芸室には子どもだけでなく保護者や教職員、上ノさんの知り合いの陶芸作家、見学者などが次々と訪れるようになった。まさにコーディネーターが下見の際にイメージが現実となった瞬間であった。大成功である。あとは上ノさんが途中で過労労働で倒れやしないか心配だったが、驚くほどのタフさで日々を乗り切り、最後には素晴らしい作品を生み出してくれた。(詳細はぜひブログをご覧ください!!)

こうしてあっという間に4か月が過ぎ去った。なんとなくやって来る子、上ノさんに話しかける子、何かを作りたいがる子、差し入れに来てくる保護者、様子を見にやってくる先生と、それぞれにとっての居場所になっていた。小学校の中に急に現れたそんな空間で、様々な出会いと喜びと笑顔が生まれた。これこそがおとどけアートがもたらす、単純にして何より大切なことなのだと思う。

素晴らしい環境とサポートを提供してくれたひばりが丘小学校教職員のみなさんと、魅力的な活動と作品展示をしてくれた上ノ大作さんに心からの感謝を込めて、ありがとうございました。

担当コーディネーター 小林 亮太郎



# おとどけアート2018年度 活動報告会

今回おとどけアートに参加していただいたアーティストが、何を考え、何をしようとしていたのか。そして、それぞれの現場では何が起きていたのかを振り返りながら、最終的には彼らが考える学校とはどういう場所なのかについてざっくばらんに話し合う座談会を開催しました！

日時 2019年1月24日(木)  
会場 よりどこオノベカ

**漆** 学校にアーティストが行くということが、おとどけアートの前提としたときに、それぞれ自身にとっての学校での存在意義について振り返ってみるとどのように思っていましたか？中島さんからお願いします。

**中島** 僕はそこまで授業に顔を出したりはしなかったのですが、どちらかというと学校のカリキュラムを邪魔しないようにしなきゃと思っていて、ある子どもが毎回活動場所に来てくれるけど、その都度授業に遅れてしまっていたので、そういったことが変なストレスになったら嫌だな、と意識的に学校のカリキュラムとは距離をとっていました。最終日の2コマのように学校側からのオーダーがあれば極力応えたいなとは思いますが、ワークショップだとか学校の授業を割いてまでってなったら、もし活動期間の途中だったら断っていただろうなと思います。

**漆** 永田さんは今回は何度か音楽の授業に参加しましたよね？そういうところで何か違和感を感じたことはありましたか？

**永田** 学校は世界を見るための物差しであったり、フィルターであったり、ちょっと救ってくれる場所でもあるから。学校ってそもそも何か。僕にとっては邪魔だしすごく必要なところですね。存在意義としては、変に凝りかたまってしまいそうなところを凝りかためないようにするには役に立つとは思いますがね。子どもからみて僕らのような変な人のルールに触れるよりは学校のルールにちゃんと従った方がいいよなって感じてもらえたりはするのかな、と。

**漆** 上ノさんはどうですか？

**上ノ** 自分が学校に行く意義ってなると、あまり見たことないような人を見せるくらいのものでしかないかなと。自分が子どもだったときは、学校は先生と生徒、あとはその親とかとしか会ってなくて、それが社会に出た時に親でもない人いるんだ、変な大人っているんだなって社会に出た時に初めて経験して、それなのかなって感じですかね。先生と親以外のものを見せるっていう。ただ年をとってるといってでもなく、他のわあとした人たち。

**中島** 永田さんはアーティストが変なルールを持ってると、というようなことを言ってたんですけど、僕自身は変なことやってるつもりはないですよ。これが自分にとっては普通であって、全力でやりたいことをやって、美しいと思うことをやっていて、学校の中にも僕は変な人ですって言うつもりもないし、僕は僕だし君は君でしょ？先生



## 登壇者

永田 壮一郎 (音楽家、作曲家)

中島 佑太 (アーティスト)

上ノ 大作 (陶芸家、造形作家)

## モデレーター

漆 崇博 (おとどけアート実行委員会事務局  
一般社団法人AISプランニング代表)

は先生だっという、僕らみんな違うじゃないですか？っていう確認みたいなことができればいいのかなって思ったんですけど。まあ確かによく変な人だねって言われますけど。たしかに変なことやろうとして変なことやってたらそりゃただの変な人ですからね。笑



本町小学校×中島佑太 教職員へ向けたアーティストトークの様子

**漆** 永田さんはどうですか？

**永田** 僕もモチベーションは本当にそれで、ただやりたいことをやっている。極端な例を出すとな人を殺したいって欲望がないから人を殺してないだけで。つまり僕らがやってることが、10年先なのか明日なのか、いつ成果が出るかわからないんですけど、でもそこに何かあるかもって思わせる何かがあるからこういう話がある訳ですよ。だからなんでもやりたいってことでもなくて。根っこのところは、僕は公共と言うものがあるとしたときに自分は公共の敵、パブリックエネミーではない気がする。

**中島** やりたいことやると言ったら、殺したかったら人を殺したいってことですか？って突っ込まれるみたいな。笑

**永田** そうそう。くだらない質問でもあるけれど。そして僕らって人を殺せないじゃん。

**中島** can or notで言ったら殺せるんじゃないですか？

**永田** なるほど。でもそういう能力があるってことじゃなくてそういう状況がないっていうか。モチベーションがないっていうか。

**漆** やるかやらないかでいうとやらないということですよ？

**永田** だってやらない選択をしてきたから留まってる訳じゃないで

すか。気に食わなければ殺せばいいじゃないっていう、例えば刑務所で服役しているような実際に人殺してる人はそれを貫いている訳で。でも、それはいわば特別な人間ですよ？社会から見たら少数だし、変わった人とも言える。そういうある種特別ともいえる人が、学校に入れるかってたら入らない方がいいんじゃないですか、というジャッジがどこからきてるのか、とかが僕らの間いなんです。僕らにとって普通ってこれですよ多分。だから何のためにやった方がいいのかなってやつですよ。良い勘違いのために僕はやっているような気がする。公共ってわからないですよ、でもなんだかそっちのことをやった方がいいんじゃないかなって。だから「小学校にアーティストを派遣する」って言葉だけ掴む時にどう言うイメージが湧きますかってことですよ。犯罪者入れる訳ないじゃないですかっていうこと。でもどうしてそうなの？って言う。つまりそれってアーティストってなんですかってことだし、アートってなんだろうって僕らが考える話なんです。



西園小学校×永田壮一郎 活動風景

アーティスト・イン・スクール(以降AIS)ではまとめてアーティストと称されていますが、その中の一つで僕は音楽家ってということになりますけど、それは自分で覚悟して言っているようなものがあるって、というのも音楽家になりたいって思ったことって実はないんですよ。ただ音楽が好きだったただけだから。だから好きなことやってるって言う意味では他のアーティストと呼ばれる人のことがめっちゃくちゃわかる。なんだか場所が違っていても多分やることは変わらないんですよ。僕、時々考えるんですけど、カルマみたいなものがあるって、なんかやりたいことがあるんですよ。これは人のためとはちょっと違いますが、僕のためにやるんですよ。そしてそれをやってたらこうなっちゃったっていう。

**漆** その僕のためっていう意味については、中島さんはどうですか？

**中島** 僕もそうですよ。みんながこの世界で同じ公共性同じ法律同じルールの中で生きていて、だけど私(わたくし)的な部分が違うわけじゃないですか。だから公共性って言われるとあたかも皆が同じものを共有してるように聞こえるんだけど、私はこういうことがしたいのでできますよね？っていうそれぞれ読み解き方が少し違っているのが、我々の職業観としてあるのかなって思うんですよ。だから公共性っていうのが今日のテーマなのかよくわからないんですけど、私にとっての公共みたいなものを提示するのが、少し違うのかもな。

**永田** AISの文字を考えたときに、インは入るってだけでアーティストとスクールの2つで言えば、スクールって公共的な存在として受けとめられやすいじゃないですか。実際はそうあるべきだと思うんですけどね。ただ、今回僕が個人的にやったことって、スクールってなんですか？アートってなんですか？僕ってなんですか？あなたって誰ですか？ってことなので、僕自身は万能じゃないし、だから公共公共って言ったところで、全人類救える訳ないですよ。もちろん僕のやっていること引っかけられない人っていますし、僕を嫌いな人もいますよ。僕はそれでいいんだよね。だからそれが出たらしいなと思ってる。

**中島** だから我々の活動って、500人くらいいる学校で限定的な関わりの中で、きっとある一定数の人としか関わってない。上ノさんの学校での活動だって全員が来たわけではないですよ？

**上ノ** そうですね。

**中島** だからその、来る人の動機って大事なのかなって思うんですよ。それゆえ公教育って均一じゃなければならぬっていう考え方もあるかと思うんですけど、やっぱり動機がそれぞれ別々な訳で、だからこそ機会が均等なのかもしれないけれど、僕らはこの活動で公教育をするために学校に行ってるわけじゃないから。だから熱烈な動機を持った人たちですよ僕らが関わった人たちは。1人で来て、1人で芸術家になりたいって言う人。スクールバンドを自主的にやっている人。僕個人と誰か個人だったりグループの代表だったり、お互いの動機がすごく一致したところでやれないと、体験として弱まっていっちゃうと言う危惧がある。僕は普段学校的な場所で行うようなワークショップとかしている身でいうのもあれですが、すごく危うくて。皆に何かっていうのをついつい言いがちなんですけど。

漆 それを言いがちだしそれを求められがちですね。

中島 そうそう。だけど体験は皆一律にはできないですね。それぞれ動機は違う訳だから。なんかその違いに投げかけたかったって言うのが、僕が今回の活動では大きかったんですけど。

漆 意外と先生方の中にもそういったジレンマも本当はあるんじゃないかなって気はしています。そういう意味では先生ではできないけれど、アーティストならできることって特に今回3つの活動を振り返らせてもらうと要所要所で言うものがあった気がして、例えば中島さん永田さんのことと言えば、ある1人の、もしくはある1つにフォーカスしていくのもそうかもしれないですけど。上ノさんのところはどちらかというわーっと子どもたちが来るような状況が多かったように思いますが、先生とか子どもが知っている大人とは違う存在って話も最初されていましたけど、何か具体的なことはありましたか？

上ノ 子ども達の反応で印象的だったのは、まず”先生”をつけるんですね。自分に対して上ノ先生って。それで僕一人一人に先生ではないんだぞって言うところからずっと徹底しました。

中島 僕は活動初日のテレビ朝会を通してそれを言わせてもらったので、一括で俺を絶対に先生を呼ぶな、という感じのことは言いましたよね。まあでもそれでもやっぱり言われますけれど。笑

上ノ そうそう。僕も最初の朝会でそれを言ったんだけど、「上ノせんせ、、、あ!!」って言う子どもがいるんですね。だから子どもにとって大人=親、学校の先生っていうのをすごく感じた。もしかしたら僕の活動していた場所が居心地よかった、よく来てくれたというのは、上ノさんは先生じゃないからっていうのを肌で感じてもらったからなのかなって。そういうのが変わっていったりとかしたのは嬉しかったかなって気はします。



ひばりが丘小学校×上ノ大作 活動風景

漆 今までの話では子ども達との話が中心になりましたけれども、先生とかの存在はどのように捉えられていましたか？振り返ってみて中島さんはどうですか？

中島 僕は、他の場所でもAISを別な人たちとやってるんですけど、今回初めて、こういった事業で先生たちとの飲み会をセッティングしてもらえて、これまで1度もそういったことがなかったので、それはとても嬉しかったです。笑

というのもどうしても学校に行くと、先生とアーティストというそれぞれ役割分担があるから、お互いのやっていることに踏み込むことに躊躇だったり遠慮みたいなものがあるけれど、学校から一歩外に出

ちゃえばそういう立場を忘れて話ができたと、そして今回それがきっかけで最後の先生方に向けたアーティストトークみたいなことができたので、一回肩書きを脱いでフラットになる場があってよかったなって思いますね。

漆 先生と関わることについては何かありますか？

中島 まあ来ていただいたり話してもらえればもちろんお話はしますが、やっぱり興味ない先生がいることも見ていて明らかにわかるし、そこまでそういう人の扉を開こうって言う時間も限られた期間の中ではなかったですね。特別先生と関わることは意識しなかった。だから邪魔しないようにするのが今回の僕のスタンスになっちゃいましたね。でも、永田さんは結構グイグイいってましたね。昨日今日で一緒に西園小に行ってきたんですけど結構先生方にもガンガンタメ口でね。笑

漆 それは前回も同じで、前回別の小学校のときは先生方とバンドを組んでいて、それぞれを“先生”っていう大きな枠組みで捉えていたけど、今回は、最初の一週間の中で先生個人個人に意識が行って、苦しんだって言う話をしていましたけど、そういう意味で先生って存在はどのように捉えていましたか？

永田 先生だろうが児童だろうが一緒で、先生にもいろんな人がいる児童にもいろんな人がいますよね。実は僕が一つ決めていたのは、「こうしてほしい」って言う要望がない限りは動かないって決めてたんですよ。だから僕を引っ張って先生のところには何度も行った。来いって言われたら僕は行くんですよ。でも目を合わせようとしなくて先生もいて、それはそれでまた別なモチベーションもあるんですけど。要望があったら行くし、なかったら何もしない、というか。



西園小学校×永田社一郎 活動風景

漆 なんか皆さん先生との距離のとり方って子どもと比べたら意識的というか。

中島 いや、僕の活動では今回たまたまアーティストになりたくて一緒にデッサンしたいんです！って言ってきたのは子どもだっただけで、それが先生だったら僕は先生とやりましたよ。

漆 上ノさんはいかがですか？

上ノ とりあえず、先生の中でも担任を持つ先生とそれ以外の先生っていうのが、僕の行った学校ではあったかなってことですかね。6年生の先生とは、シーサー作りの授業があったので話したりはしましたが、それこそ僕も僕の方から先生たちに対してグイグイいってことはしなかったし、あまり今回は考えなかったですね。でももっと来てくれたらよかったのに、とは思いました。担任を持っている

ので忙しいのはあるとは思んですけど。自分の意思で茶室に来て飲んだ先生っていないと思います。

漆 実は、一度活動の途中で上ノさんの行っている学校の校長先生と話したことがあって、これだけオープンに活動だから先生方にもっと参画してもらってもいいですよってちらっと聞いてみたら、以前の別な小学校での事例を出して、コーディネイトとして職員室内で校長先生から他の先生に話を広めたりしてたこともありまして、と話したら、そうか、俺にはそれが足りなかったなって言っていて。もしかしたらその後には、職員室でそういったことがあったのかなって思いながら今聞いていたんですけど。



ひばりが丘小学校×上ノ大作 6年生が授業で作ったシーサー

上ノ なかったかもしれませんね。来る先生はガンガン来てたんですよ。担任外の先生ですが。僕としては全先生に来て欲しいなって思いましたけど。それこそ子ども達にもそうなんですけど、来てください、とは言わないんですね。ただ、興味を持たせられなかったんだってのはちょっとあります。来ない子ども達と同じで、来ない先生は来ない。

漆 いろんなアプローチの仕方がありますし中身の問題ももしかしたらその都度あったのかもわからないですけども、先生方も決して暇ではないからそういう状況も確かにあるでしょうね。では、最後の質問にさせてもらうのですが、今までお話しいただいた子どもの存在、先生の存在、みなさんが活動を展開してくれたある種のきっかけみたいなものがあった場合に、皆さんにとって学校と言う場所をどんな風に捉えていらっしゃるのか。もしかしたらそれが活動前と活動後で変化があったのか、今回は小学校でしたけど、学校って何だろうなって考えたときに、今何かご自身にとっての考えがあれば1人ずつ教えてください。

中島 結構今回面白かったのは、学校に毎日通って基本的には中休み、給食、昼休みとなんとなく一緒に過ごしたんですけど、拠点となる教室を離れて図書室に行き、団地フェチなので学校出て団地を見にいったり近隣をもっと散策しようとしたんですけど、あまりにも寒くて北海道の対策ができていなくて断念して。だから外を歩きたいなことはしなかったんですけど、結果的に1人のムスリムの女の子との出会いを通じてモスクに行き、モスク自体は校区の外側だったんですけど、僕らイスラム教のことを勉強したり、イスラムの方からレクチャーを受けたりとか、その女の子と一緒にフゴッペ洞窟に行ったりとか、それ以外にも学校の中にはいろんなルーツを持つ子ども達がいる、地図を通して旅行どこに行ったらとか、お父さんはどの国の人でね、だとかの話を通して校区の地域のことだったりそこから広がって札幌のこと、北海道のこと、さらには周りにある世界のことっていう風に僕の思考や想像が、外に広がったことが衝撃的だったように感じましたね。なので学校っていうイメージが僕の中で



本町小学校×中島佑太 活動風景

はずごく閉じた、子ども達を守るためにある程度閉じる部分は仕方ないのかなとは思んですけど、すごく閉鎖的な場所のようにもネガティブに考えていたとも思んですけど、その中からもそこを通じていろんなものが見えるんだなって新しい回路になった気がしましたね。だからそういう意味では僕にとっては、アーティストとしてはものは作らなかつたし、ものとしての作品は作らなかつたんですけど、そんな風に広がっていったことが面白かったですよね。リサーチの場所としてすごく面白かった。

漆 ありがとうございます。永田さんはどうですか？

永田 すごく必要な場所だし、すごく邪魔な場所だなんていう感じです。すごく両方ある。一概に良いとも言えないし、逆に一概にすごい悪いとも言えない。両極端でわけでもなく中間ももちろんありますが、学校があるからわかったことってたくさんあると思うし、学校のカリキュラムというか場があったせいで起こってしまったと感じることも多分あるかな。

漆 ちなみに学校にまた関わってみたいという想いはありますか？

永田 正直、僕が普段どこでもやってることですよ。それが学校でお願いしますっていうだけで。だから特別に学校でってことはないですね。でも関わるには特別な場として考えるから見なきゃいけない。そうしなければきっと後で後悔する。そういったお話があって設定されるのであればそれはもちろん。

漆 ありがとうございます。上ノさんはどうですか？

上ノ 自分が小学生だったときと比べて今の小学生忙しそうだなっていうのが率直な感想ですよ。それに面白さを感じてはいましたが、自分の過ごしてきた小学校時代との違いに驚きました。だから授業が終わったあと、学校ですつと遊んでる子どもっていないんだっていうのが衝撃でした。放課後、ミニ児童会館の子ども達はいるけど、それ以外の子どもは早く帰りなさいって言われている。それでも帰らなくて僕のところで遊んでる子どもの父兄から電話がきけることもありました。僕は教育とはこうあるべきだ、というものはさすがにないんですけども、もうちょっと何でもない時間ってあっても良いんじゃないかなって思いましたね。何かそういうものをこういう機会に提示するというか、隙間を生み出していくようなことを意識していましたよね。それを作りたかったっていうか。

漆 だからこそそれってことですよ。ありがとうございます。長丁場でしたが登壇していただいたアーティストの皆さん、会場の皆さんもお付き合いいただきありがとうございます。では、最後に3人に拍手をお願いいたします。





## アーティストと考える学校の未来

アーティストにとって小学校で創作活動を行うことは、経験のある・なしに関わらず普段の活動環境からすると極めて特殊な状況であることは否めない。子ども達や先生の存在を無視しては進められないし、使い慣れた道具が準備されているわけでもない。もっといえば、公共施設或いは教育機関特有の制約を強いられることもある。そうした状況下において学校で自分が何をすべきで、どのような影響を与えるのか、アーティストそれぞれに葛藤があり、また発見もあったに違いない。そこで、今年度おとどけアートで実施した活動を経て開催した参加アーティストによる座談会を踏まえ、改めておとどけアートが学校にもたらした影響を考えてみたい。

振り返ってみると、それぞれの活動の序盤にアーティストが一様に考えていたことが、自分は何のために学校に来ているのかということに向き合うということだった。言い換えれば、この取り組みにおいてアーティストの存在意義とはどういうものなのかを確認することに意識的であったともいえる。しかしそこから、活動の影響にそれぞれの特徴が浮かび上がってくる。

西園小学校で活動した永田さんは、2回目のおとどけアートの参加ということもあり、特に意識的であったと推測するが、全体に対してあえて主体的に関わり生み出していくような行動はとらず、自分という存在に反応を示した個人にフォーカスし、より深く関わっていく態度を貫いていった。特に活動後半、部員の減少によって存続の危機にさらされていたスクールバンドとの関わりは、他の児童たちとの交流を断ち切って展開される場面もあるほど入れ込んでいったのだが、結果、多くの児童や先生方にスクールバンドの存在をアピールし、活動終了後数ヶ月の間に目標としていた新入部員の獲得に至った。

また、本町小学校で活動した中島さんも、「井戸端会議」と称したコミュニケーションの入り口となる環境を作るなどアプローチこそ異なるが、永田さん同様、目的を持って近づいてきた個人との関係性を重視していくなかで、自らの命題を絞り込んでいった。特定の児童や先生と情報を共有するという行為から、共に考えるという時間を過ごす中で、いつしか彼らを媒介に、その周辺にいる人々がアーティストの存在に興味を抱き、結果として授業時間でのワークショップや先生方を対象としたアーティストトークの実施など想定していなかったいくつか交流プログラムが生まれていった。

一方、ひばりが丘小学校の上ノさんは、他の二人のアーティストとは違い、約4ヶ月にわたる長期での活動を想定していたことや、活動当初から学校サイドからの交流プログラムの実施要請があったこともあり、授業への参画や、保護者とのワークショップをきっかけとしながら虎視眈々と自らのパフォーマンスを発揮する機会をうかがっているように感じた。そうした前半の種まきが実を結び、学校の中にある環境や機能を存分に活用した取り組みが展開された。最終的に上ノさんが制作した「茶室」には、連日多くの子ども達や先生、保護者が行き交う状況が生まれた。気がつけば、活動終了後も上ノさんの個人的な作品制作の為にその環境として活用させていただくほど学校との信頼関係が強固なものとなっていった。

このようにそれぞれの活動を振り返ると、アーティストが先生や児童、保護者という立場ではできない、アーティストという立場の自分にはできないことを突き詰めていった結果、そのアーティストに関わった個人の行動に大きな影響を及ぼし、結果としてその個人が、今までにはない新しい状況を立ち上がらせる仕掛け人となっていった。この事実を踏まえ、これまでも多くの学校でおとどけアートのコーディネーターに関わってきた私にとって、アーティストは未来のあるべき学校像を示す道しるべのような存在であると確信した。

おとどけアートは、学校の未来の姿をアーティストと一緒に考え、予感し、主体的に参加する個人を介して様々な影響が拡散することにより、将来的に学校が再定義されるきっかけを生み出すプロジェクトとして、今後も活動を続けていきたい。

コーディネーター 漆 崇博

札幌市内の活動

- 2006年10月2日(月)～10月6日(金)・14日(土)  
札幌市立清田小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)
- 2007年1月22日(月)～2月2日(金)  
札幌市立山の手南小学校 × 野上 裕之(彫刻家)
- 2007年2月5日(月)～2月16日(金)  
札幌市立有明小学校 × 石川 直樹(写真家)
- 2007年11月26日(月)～12月7日(金)  
札幌市立新陵東小学校 × 宝音 & 園布(版画家)
- 2008年2月4日(月)～2月15日(金)  
札幌市立新光小学校 × 河田 雅文(美術家)
- 2008年11月10日(月)～11月21日(金)  
札幌市立太平小学校 × 高橋 喜代史(美術家)
- 2009年1月26日(月)～2月6日(金)  
札幌市立幌西小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2009年11月4日(水)～11月13日(金)  
札幌市立屯田南小学校 × 今村 育子(現代美術家)
- 2010年2月8日(月)～2月24日(水)  
札幌市立北小学校 × 東方 悠平(現代美術家)
- 2010年10月12日(火)～12月3日(金)  
札幌市立清田小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2010年11月8日(月)～11月19日(金)  
札幌市立福住小学校 × 齊藤 幹男(彫刻家)
- 2011年1月19日(月)～2月4日(金)  
札幌市立常盤小学校 × 富士 翔太郎(画家)
- 2011年2月7日(月)～2月19日(土)  
札幌市立旭小学校 × 片岡 翔(映画監督)
- 2011年9月26日(月)～10月15日(金)  
札幌市立稲積小学校 × 小助川 裕康(美術家・庭師)
- 2011年11月28日(月)～12月16日(金)  
札幌市立あいの里西小学校 × 富田 哲司(現代美術家)

- 2012年1月17日(火)～2月3日(金)  
札幌市立みどり小学校 × 山本 耕一郎(現代美術家)
- 2012年8月20日(月)～9月6日(木)  
札幌市立石山東小学校 × トムスマ・オルタナティブ(現代美術家)
- 2012年10月1日(月)～10月13日(土)  
札幌市立富丘小学校 × 本田 蒼風(アート書家)
- 2013年2月1日(金)～2月15日(金)  
札幌市立もみじの森小学校 × 小川 智彦(ランドスケープアーティスト)
- 2013年8月20日(火)～10月4日(木)  
札幌市立資生館小学校 × アサダワタル(日常編集家)
- 2013年9月1日(日)～12月24日(火)  
札幌市立北陽小学校 × 佐藤 隆之(芸術家)
- 2013年10月1日(火)～10月12日(土)  
札幌市立三里塚小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)
- 2014年2月10日(月)～2月21日(金)  
札幌市立北陽小学校 × 風間 天心(芸術家/僧侶)
- 2014年8月20日(水)～12月6日(土)  
札幌市立北陽小学校 × 加賀城 匡貴(ステージパフォーマー)
- 2014年9月16日(火)～9月26日(金)  
札幌市立元町小学校 × ダムダンライ(芸術家)
- 2014年11月4日(火)～11月15日(土)  
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)
- 2015年2月9日(月)～2月20日(金)  
札幌市立山鼻小学校 × 持田 敦子(芸術家)
- 2015年9月1日(火)～11日(金)、  
2016年2月23日(火)～26日(金)  
札幌市立星置東小学校 × 永田 社一郎(音楽家、作曲家)
- 2015年11月2日(月)～2016年2月18日(木)  
札幌市立栄東小学校 × 小町谷 圭(メディアアーティスト)
- 2016年1月19日(日)～2月13日(土)  
札幌市立平岸高台小学校 × 黒田 大祐(美術家)

- 2015年6月18日(木)～12月24日(木)  
札幌市立北陽小学校 × halle(アーティストグループ)
- 2015年10月21日(水)～2016年2月26日(金)  
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)
- 2016年10月3日(月)～10月22日(土)  
札幌市立鴻城小学校 × 山崎 阿弥(声のアーティスト)
- 2016年12月6日(火)～12月16日(金)  
札幌市立西岡小学校 × 深澤 孝史(美術家)
- 2017年1月23日(月)～2月17日(金)  
札幌市立苗穂小学校 × 進藤 冬華(美術家)
- 2016年11月22日(月)～12月2日(金)  
札幌市立月寒東小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2016年4月27日(水)～2017年3月24日(金)  
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則(行為情報体)
- 2017年10月24日(火)～11月8日(水)  
札幌市立拓北小学校 × まるみデパート/梶高慎輔、梶高果代(アートユニット)
- 2017年11月17日(水)～12月1日(金)  
札幌市立有明小学校 × 東海林 靖志(舞踊家)
- 2017年12月1日(金)～12月14日(木)  
札幌市立山の手小学校 × 川上 りえ(美術家)
- 2018年1月22日(月)、25日(木)、  
2月1日(木)～13日(火)  
札幌市立澄川南小学校 × ミッシェル・アンジェリカ・カビルド(アーティスト)
- 2018年9月18日(火)～12月25日(火)※内28日間  
札幌市立ひばりが丘小学校 × 上ノ 大作(陶芸家、造形作家)
- 2018年10月30日(火)～11月9日(金)  
札幌市立西園小学校 × 永田 社一郎(音楽家、作曲家)
- 2018年11月12日(月)～11月26日(月)  
札幌市立本町小学校 × 中島 佑太(アーティスト)

札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2018

- 主催 おとどけアート実行委員会
- 支援 札幌市
- コーディネート 一般社団法人 AISプランニング
- 後援 札幌市教育委員会
- 協力 さっぽろ天神山アートスタジオ  
札幌市立西園小学校  
札幌市立本町小学校  
札幌市立ひばりが丘小学校

札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2018記録集

- 発行 おとどけアート実行委員会
- 協力 札幌市立西園小学校  
札幌市立本町小学校  
札幌市立ひばりが丘小学校
- 企画・編集 一般社団法人AISプランニング

アイス

おとどけアート実行委員会事務局 一般社団法人AISプランニング

〒064-0811 北海道札幌市中央区南11条西7丁目3-18  
 TEL 011-596-6726 FAX 011-596-6727 E-mail info@ais-p.jp HP http://ais-p.jp/  
 事務局担当(小林) TEL 070-5288-5367 E-mail ryotaro@ais-p.jp

札幌市外の活動

- 羽幌町(1)**  
2009年6月30日(火)～7月1日(水)  
羽幌町立天売小・中学校 × 石川 直樹(写真家)
- 旭川市(1)**  
2017年12月16日(土)、17日(日)  
旭川市民文化会館 × 石川 直樹(写真家)
- 美瑛市(1)**  
2012年8月16日(木)～8月17日(金)  
アルテピアッツァ美瑛 × 石川 直樹(写真家)
- 岩見沢市(1)**  
2012年10月13日(土)～10月14日(日)  
岩見沢駅構内 × 長谷川 仁(美術家)
- 石狩市(1)**  
2018年9月3日(月)～9月5日(水)、  
12月3日(月)～12月7日(金)  
石狩市立紅南小学校 × アサダワタル(音楽家、文筆家)
- 真狩村(1)**  
2012年1月12日(木)～13日(金)  
真狩村立真狩小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- ニセコ町(1)**  
2006年1月22日(月)～2月2日(金)  
ニセコ町立ニセコ小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)
- 豊浦町(1)**  
2006年11月7日(火)～11月17日(金)・20日(月)  
豊浦町立大岸小学校 × 釜山分校 × 磯崎 道佳(彫刻家)
- 大樹町(1)**  
2010年10月25日(月)～11月5日(金)  
大樹町立大樹小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)
- 中札内村(1)**  
2011年11月21日(月)～12月2日(金)  
中札内村立中札内小学校 × 藤藤 一郎(未来芸術家)
- 松前町(1)**  
2010年9月27日(月)～28日(火)  
松前町立松城小学校 × 石川 直樹(写真家)
- 様似町(1)**  
2013年7月29日(月)～8月3日(土)  
様似町立様似中学校 × 長谷川 仁(美術家)

- 士幌町(6)**  
2006年12月4日(月)～12月15日(金)  
士幌町立北中音更小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)  
2007年8月27日(月)～9月7日(金)  
士幌町立佐倉小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)  
2007年10月1日(月)～10月12日(金)  
士幌町立北中音更小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)
- 帯広市(4)**  
2005年1月24日(月)～2月4日(金)  
帯広市立大正小学校 × KOSUGE 1-16(美術家)  
2006年2月6日(月)～2月10日(金)  
帯広市立花園小学校 × 杉浦 圭太(俳優)  
2006年2月18日(土)  
帯広市立大正小学校 × クニ 河内(音楽家/作曲家)  
& 野田 美佳(音楽家/打楽器奏者)  
2007年9月18日(火)～9月28日(金)  
帯広市立広陽小学校 × anti-cool(パフォーマー)

- 2008年7月23日(水)～8月1日(金)  
士幌町立佐倉小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)
- 2008年10月6日(月)～10月17日(金)  
士幌町立北中音更小学校 × 平原 慎太郎(ダンサー)
- 2009年8月24日(月)～9月11日(金)  
士幌町立北中音更小学校 × タノタイガ(現代美術家)
- 大空町(1)**  
2013年11月21日(木)～22日(金)  
大空町立豊住小学校 × 石川 直樹(写真家)
- 斜里町(1)**  
2014年7月14日(月)～15日(火)  
斜里町立朱円小学校 × 石川 直樹(写真家)
- 清里町(1)**  
2017年12月14日(木)、15日(金)  
清里町立清里中学校 × 石川 直樹(写真家)
- 羅臼町(1)**  
2017年8月22日(火)～8月27日(日)  
義務教育学校知床ウトロ学校 × アサダワタル(音楽家、文筆家)
- 標津町(1)**  
2017年1月11日(水)、1月12日(木)  
標津町生涯学習センターあすばる × 石川 直樹(写真家)
- 中標津町(1)**  
2014年8月8日(金)～16日(土)  
斜里町立西竹小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 音更町(2)**  
2005年8月22日(土)～8月26日(月)  
音更町立音更小学校 × ゴウヤスノリ(ワークショップ・プランナー)  
& 松本 力(映像アニメーションアーティスト)  
2008年9月1日(月)～12日(金)  
音更町立東士狩小学校 × wah(参加型表現活動集団)
- 幕別町(1)**  
2007年2月20日(火)～3月2日(金)  
幕別町立途別小学校 × 祭太郎(パフォーマー)
- 浦幌町(2)**  
2009年10月26日(月)～11月6日(金)  
浦幌町厚内小学校 × 石川 直樹(写真家)  
2011年9月20日(火)、21日(水)、  
11月23日(水)～25日(金)  
浦幌町立厚内小学校 × 石川 直樹(写真家)



活動スタッフ随時募集中!  
 おとどけアートをもっと知りたい、活動に関わりたいという学生や一般の方々を対象に活動スタッフの募集を行っています。事前準備や打合せから関わりたい方から、小学校での活動に参加したい方まで、幅広く募集をしています。実際の活動だけでなく、おとどけアートに関する説明なども行っています。一緒に活動を盛り上げたい、興味・関心がある方はぜひご連絡ください。過去の活動はブログからご覧いただけます。  
<http://inschool.exblog.jp/>又は「おとどけアート」で検索!